

光り輝く白い音階

text by Shinji Ishii
文いしいしんじ

宮古島でウミヘビに会った。

数あるビーチのなかでも安全で知られ、家族連れに人気がある新城海岸。7歳のひとひは4歳の頃から毎年かよっていて、

「ひさしぶりー」

と次々ハイタッチしてくれる、海の家「わーら」のみんなとは親戚みたいな間柄だ。その、わーらのおかみさんが「ウミヘビは、こっちはなんもしなかったら、なんも危なくないよ」といった、そのことばを覚えていたんだろう、ひとひは海面に浮かんだまま、シュノーケルの息をしゅーこしゅーこ響かせて、海底を通り過ぎていく真っ白い光の棒を、まばたきするの惜しげに凝視していた。

翌朝はウミガメに会った。これはたまたまでなく、地元のガイドツアーに参加したから

遠浅のリーフで、波が泡立っているところから先へは、ぜったいに出ないでください、と宿のひとにいわれていた。黒島の海は透明度が高く、青がいつそう青く、黄色がいつそう黄色く、際だって見える。魚を追っていることをしばらく忘れた。僕は、青を、赤を、色自体を追いかけているのだ。そのうちに海が盛りあがる感触がし、さらにもう一度下降した。僕は気づかず、リーフの外へ出てしまったのだ。

それまで2メートルほどだった海底が、一気に見えなくなった。切り立った崖から、闇の虚空へ、飛び出したようなものだった。僕は呆然と海中を漂った。なんの意識もせず、浮力を失いつつ、重力の掌へ、深々と落ちていった。薄闇が濃度を増し、水温はみるみる下がっていく。

そのとき闇の水底から、しま模様の子が浮きあがってきた。ものすごい速さだった。紐の横に一對の腕が生え、五、六本の指があった。ヒレだったかもしれない。紐の先端に顔があった。ひげを生やした男の顔だ。なにか異様に怒っている。僕は恐怖し、どこからわきあがってきたかわからないまま、手足を懸命に動かす。水を掻いた。海面に頭を突きだし、

だ。女性ガイドに先導され、シガラビーチの波打つ海を、ひとひ、奥さんの園子さん、僕の順で、慌てず力を抜いて泳ぐ。目印は、ガイドがロープで引いていく浮き輪。新城よりは深度があり、およそ2メートル半ほどだろうが、ゴーグルから海底へ黒い視線を散らしながら、リーフを越し、波を切り、四人ならんで進んでいく。

見つけた。およそ体長1メートルのアオウミガメが砂地に這いつくばって、からだを右へ、左へ、と傾げる運動をしている。ガイドが潜っていく、浮き輪のロープを近くの岩へ結わえ付ける。

ウミガメのふしぎな運動は、食事だった。まわりに散らばった海藻のかげらを、一瞬たりとも休まずに食んでいる。2メートル半潜り、目のそばで観察しても、なんの気も留めず、笑った感じの口を動かさずにつける。

暖かな吸気を肺に吸い入れたとき僕は、自分がこの場で生まれ変わった感じがした。あれがなんだったか、いまだにわからない。たぶん僕にとって、大切ななかだ。

宮古最後の日、ひとひはまたウミヘビを見つけた。新城海岸だった。シュノーケルの声が「おとーふあん、ふおら、うみふえい、うみふえい」ときこえ、反転して潜ったら、白地にブルーのストライプをつけた幼いウミヘビが、白砂の上で上下左右に、長細いからだをくねらせていた。はてなマーク。ハ音記号にト音記号。四分休符に、八分音符。

そうして海面に浮上してくる。ひとひは海

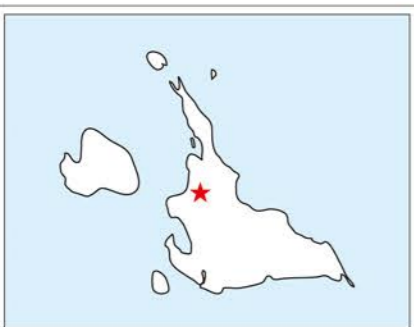
と、やにわに首をもたげ、水底から離れ、浮力に任せる感じで浮上をはじめた。僕もあとを追う。海面の園子さんとひとひが、近づいてくる、近づいてくる、近づいてくる。

ガバリ、と水面に顔をだした瞬間、ひとひとウミガメの頬は、ほとんどこすれ合っていた。カメは虫類なので、10分に一度の割合で、息継ぎにあがってくるのだとか。ほんの数秒の呼吸だけで、ウミガメはまた、2メートル半の底へ潜っていく、絶え間のない食事をリスタートした。食欲、というより、そうするのが楽しくてしかたがない、と、そんな風に見えた。

そういえば、八重山諸島の黒島で、正体のわからない不思議な生きものに会った。神様的一种だったかもしれない。

からだを預けて浮遊している。幼いウミヘビは鼻先を海面にだすと、ぼ、ぼ、と息継ぎし、新城海岸のどこかへ泳ぎ去った。

宮古では毎晩、民謡酒場に出かける。ひとひが4歳のころからの習慣だ。安里屋ユンタに、喜納昌吉。沖縄の民謡は、西洋音階とちがいが、「レ」と「ラ」を抜いた五音を主に使う。あの上がり、下がりの運動は、海面と水底を往復する素潜りに、どこか似ている。日中も夜も、あんな音楽を浴びているから、沖縄の海では、五音階メロディみたいな生きものに出くわすのかもしれない。



宮古島 (沖縄県 宮古島市)

国	: 日本
面積	: 204.20km ²
人口	: 51,236人(推計人口2018年7月1日)
人口密度	: 251人/km ²
市の木	: ガジュマル
市の花	: ブーゲンビリア・デイゴ

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない!」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

